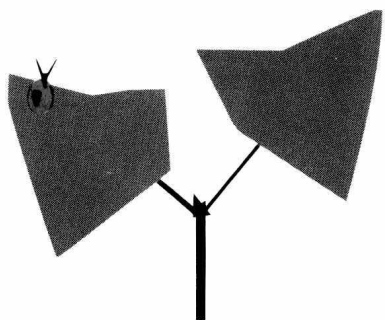


舞いの家・果樹園への道



立原正秋

舞いの家・果樹園への道



立原正秋

新潮社版

立原正秋選集 9

舞いの家・果樹園への道 まい いえ かじゅえん みち

一九七四年一月二〇日発行
一九八一年五月一〇日三刷

著者 立原正秋 たちばらまさあき

装幀者 妣田圭子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒100 東京都新宿区矢来町七一

電話 (業務部) 03(二六六―五二二―)
(編集部) 03(二六六―五四二―)

振替東京四一八〇八

二光印刷 新宿加藤製本

定価 一一〇〇円



〈第二回配本〉

© 1974. Masaaki Tachihara. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

立原正秋選集 9 目次

夢のあと 5

鯖鮎 31

果樹園への道 52

舞いの家 112

立原正秋選集 9

夢のあと

1

溶けかかった雪が斑^{まだら}になつてゐる雑木林で、椋^{えんりゅう}鳥が白い腹をみせて波のように飛び交つてゐた。雑木林には椿^{つばき}の木がかなり自生してゐた。まだらになつた白い雪の上に赤い椿の花が落ちてゐた。椋鳥は椿の木を好んで寄つてくる、と泰子はいつだったか夫の戸田順二から聞いたことがある。

小さな島で海拔三十メートルもあったから、急な坂道であつた。ここまで登つてくると磯の音はきこえてこない。小さな島でもなかにはいつてしまうと島の感じは消える。楠^{くすのぎ}や椎^{しい}の大木もあった。鎌倉時代からつたわつてゐる神社もあった。弁財天を祭つてゐると言われてゐた。篠山^{しのやま}明から、あなたは弁財天みたいないひとだな、と言われたことがあるが、泰子は弁財天を知らなかつた。

坂道をのぼるにつれ、片側にあつた旅館も土産品店も軒がすくなくなり、雑木林は森閑としてくる。泰子は坂道をのぼりきつて平坦な頂にでた。ぽつと肩で息をし、着物の裾を直した。雪どけ道だと思つて駒下駄をはいてきたが、

坂道をのぼってくるのは骨が折れた。頂には燈台をかねた展望台があり、植物園があり、その周りには土産品店が並んでゐたが、雪のあくる日の週日のせいとか、人影がなかつた。

泰子がいまのぼつてきた坂道は北側にあつた。頂上から南側の坂道をすこし降^ふつた左側に、篠山明の陶房がある。北側は雪どけの水が流れてゐたが、南側はもう雪は消え、道は乾いてゐた。陽の光が美しく、島の南側は春であつた。道端には蒲公英^{たんぽぽ}が咲いてゐた。一週間前ここにくたときにもこの蒲公英は咲いてゐた。気持ちゆとりがあつた。ゆとりがあるのは、わたしの気質のせいだ、と泰子は夫と篠山のあいだを往還してゐる自分の生身をふりかえりながら坂道をおりて行つた。

篠山の店には、樂焼^{らくやき}と書いた看板がさがつてゐる。厚い板に字を彫りこんだ看板であつた。看板はこちちから行つても向うからきても見えるように軒から垂直にさがつてゐる。板の両面に字が彫つてあつた。その板に正午の陽がさしてゐた。泰子は看板の前でたちどまり、けつきよくは、わたしの気質がわたしを滅ぼしてしまふかもしれない、と思つた。それは低^ひ確^{かく}実^{じつ}なことに思へた。看板にさしてゐる陽の光はつぶらで嘘^{うそ}がなかつた。この島の南側はいつも明るすぎる、と泰子はおもつた。島の北側にはごまかしがあつたが、南側はいつも陽に曝^{さら}されてゐた。北側には樹木

が繁茂していたが、南側は潮風に曬された樹木が拉げた枝を空にむけて突き立てていた。それらの樹木には葉がなかった。葉が潮風でむしりとられていくのに、枝と幹は空を突いていた。泰子は、この島の北側を夫にたとえ、南側を篠山に譬えたことがある。そこには陰湿の風土と乾燥した風土のちがいがあった。それは、違い、というほどの性質のものではないにしろ、瞭に差があった。篠山には、潮風に葉をむしりとられた樹木のように無駄なものがなかった。ガラス戸をあけて店のなかにはいると、楽焼にする素焼の器が棚にいっぱい並んでおり、窯が店のすみにある。

篠山は海が見おろせる廊下で仕出弁当をたべていた。仕出弁当は、島の北側の橋の手前にある旅館でこしらえていた。篠山は昼はいつもその弁当をたべていた。

泰子はストーブの上にかかっている薬罐をおろし、茶を淹れた。茶を淹れる湯の音にまじって潮の音がつたわってきた。流れが速く、一日中潮の音が絶えない場所であった。むかいの漁師町から島にかけて、浅い瀬戸の上に鉄筋コンクリートの橋が渡っている。この瀬戸は深いところで二メートルしかなく、総体に浅いせいか潮の流れが緩かった。かわりに南側の海の流れが速かった。

「雪はどうだった」

篠山は弁当をたべ終ると茶をひとくちすすり、それから煙草をつけてからはじめて話しかけてきた。泰子は顔をあ

からめた。篠山には気づけなかった。昨日の雪の朝、泰子はおそくまで夫の床のなかにいた。からだにはまだ夫の手の感触がのこっていた。感触がのこっているのに、きょう島にきたのは、心が乾いていたからである。篠山を訪ねてきたのは、ただそれだけの理由だった。それだけ、と泰子は自分に言いよかせながら、この、それだけ、という心情が実はたいへんなものであることを一方では感じていた。「陽のささない個所にはまだ雪がのこっておりますわ」

「三月なかばだというのに、こんな大雪はめずらしい。もっとも、ここでは、あくる日の午前中にはみんなとけてしまったが……」

「北側にはまだ残っていましたわ」

「五日前から島を出ていないんでな。そうか、北側にはまだのこっていたのか」

「五日間、ずうっと、仕出弁当？」

「まあ、そんなところだ。別に苦にはならない」

篠山は煙草をつけた。ええ。

泰子は目前にひろがっている海を眺め空を見あげた。空が澄みすぎている、と思った。伊豆半島と大島が見えた。澄みすぎた空が硬かった。

「益子に小さな家を見つけた」

と篠山が言った。

「そんな話、いままできいていませんでしたわ」

「夏はここで炭焼を売り、冬は益子に引っこむつもりでいる」

「夏しか逢えない人になるのですか」

篠山は返事をしなかった。

「益子って、茨城県にあるんですか？」

「いや。栃木県だ。東北本線の小山で乗りかえる」

「ずいぶん話が急ではありませんか」

泰子は慥（しんじ）みを言った。

「あなたに話す必要のない、私の仕事のなかでのことだったからね」

篠山は、夫の戸田順二より八つ若い三十二歳だった。泰子は二人の男の中間にいた。三十六歳という女の年齢が、ここまで足を運ばせているのだろうか、と泰子は考えたことがある。中学一年になる男の子と小学校五年になる女の子がいる母親だった。母親は、橋を渡って島に一步足をふみいれると同時に女に変貌する。変りかたが自分でもわかった。島に渡り、坂道をのぼるにつれ、泰子の表情には女の妖しさがにじみでてくる。そして坂道をのぼりきり、炭焼の店の前に立ったときには、自分が見えなくなってくる。その頃の自分がわかるのは、島から家に帰り家庭の主婦に戻ったときである。

一年ほど前、夫の戸田順二が、李朝（りちょう）の鉄砂文字の壺（か）を買、篠山に鑑定をたのんだ。篠山はまだ若いのに美術評論

家として一家をなし、目ききとして通っている、という話だった。李朝の壺の鑑定をたのんだときには家に来てもいい、酒肴（しやく）をだしてもてなした。そのとき、島に窯をもっているというので、いちど窯を見に行こうか、と夫が言いだし、それから間もなく泰子は夫につれられて窯を見に行った。その日、夫は、篠山が焼いた壺と皿を買いもとめた。泰子が独りで篠山を訪ねたのは、それから十日ほど経ってからである。日常品の茶碗とか湯呑を買う理由で出かけたが、泰子には、篠山が壺を鑑定にきた日から、彼が心にひっかかっていた。無駄なものを感（かん）じさせない男にはじめて出あった気がしたのである。

泰子は背をしめてから部屋をでた。篠山は廊下の椅子にかけて煙草（たばこ）を喫（く）んでいた。篠山が出て行ってから泰子は三十分ほどどうとうとしたのであった。

「いつから益子にいらっしやいますの」

泰子は篠山のむかいがわに掛け、冷えた茶をひとくちのんでから訊いた。

「いま大工がはいっている。月末になるだろう」

「それで、夏はこちらにいらっしやるとしても、冬は益子にこもりきりになるんですか」

「たぶんね」

「たとえば月に一回こちらに見えるとか……」

「そんな月もあるかもしれないが、だいたい益子にいる方が多くなるだろう」

「こまりますわ……」

篠山は返事をせず煙草をつけかえた。

「ここから、どれくらいかかりますの？」

「ここから上野までが一時間半、上野から急行を利用して小山のりかえて二時間半くらいかな」

「往復八時間もかかるんじゃない、困りますわ」

「こまるね」

「あなたが困るんですか？」

「夏場だけの恋人にしておけばよいではないか」

「そんな殺生……」

と泰子はのどまで出なかった言葉をのみこんだ。益子まで渴きを癒しに行かねばならないだろう、と思ったのである。篠山は日常生活に無駄の多い人間だったが、人間そのものには無駄がなかった。彼が、夏場だけの恋人にしておけばよいではないか、と言うからには、月に一度益子からこちらに出てきても、声をかけてくれることはないだろう、ということが泰子にはわかっていて、いままでもそうだったが、彼は、泰子に約束をさせなかった。このつぎは四日後に伺うわ、などと泰子が言うのと、そういう約束はしない方がよい、来てみて相手がいないければ帰る、居ればはいってくる、その方がいいよ、と彼は答えた。そんな男になに

を言ったところで無駄な気がした。

「益子って、山の中ですか」

「山のなか？ いや、そうではない。低い山に囲まれた盆地といえいいかな。いいところだ」

「そんなにいいところですか……」

泰子は自分の氣質をふりかえてみた。わたしは、このひとに逢いに行くだろうか……。

帰りの雑木林ではもう椋鳥の姿は見られなかった。坂道の片側の溝を、雪どけ水が澄んだ音をたてて流れていた。

2

ゴルフ場からは丹沢山脈がすぐ目の前にあった。右方にある大山はここからは見えない。塔ヶ岳とその手前の鍋割山が、霞がかって見える。

五年前の春、泰子は夫にさそわれてゴルフをやりはじめたが、性に合わず、三カ月でやめてしまった。ிரایی、ゴルフ場に来たことはない。夫はゴルフ場の会員になっていた。このほかに伊豆、千葉、軽井沢、黒磯のゴルフ場に出かけていた。

いつだったか泰子は篠山にゴルフをおやりになる気はないの、と訊いたことがある。

「ゴルフか。あれは、老人のやる運動だろうな。興味ないな」

と篠山は答えた。そして彼は、泥土をいじる方がよほど運動になる、とつけ加えた。島の彼の陶房では、陶器の泥土を精製する設備がそなえてなかった。彼は益子から精製された泥土を買い入れていた。益子に越したのは、自分の手ではじめからやりたかったからだろう。

「鑑定家が自ら泥をいじるのは珍しいことではない。最後はそこに行きつくんだな」

と彼は言っていた。轆轤くわだまを足げりにして廻しながら泥土の塊から器をこしらえて行く彼の姿を見ると、静穏なひかりがみなぎっている感じだった。そこにはすこしの無駄もなかった。

彼が益子に越したのは八日前である。越す前の日に泰子は彼の店を訪ねた。あくる日は正午に島をでるというので、十時に島に渡ったが、店はすでに閉ざされていた。ガラス戸かどごしに店のなかのぞけ、素焼の器が棚にならんでおり、あがり框の障子はひらいていた。そしてその向うに廊下のガラス戸が見え、ガラス戸の向うに海がひらけていた。今朝までそこに人が棲んでいたのに、外見はなにか夢のあとのような荒涼とした感じだった。荒涼としていながらそこには空気があった。窯から発する火の熱で空気は温かく、篠山はその空気のあいだを縫って益子に移転して行ったに

ちがいない。荒涼としていながらそこにはまだ篠山のあたたかさが残っていた。そのあたたかさを泰子は窯の余熱だと思った。

ゴルフ場のレストランからゴルフ場が眺めおろせた。夫がこっちに歩いてくるのが見えた。洋酒を輸入している会社の社長で男っ振りもよかった。それに、骨董の収集家では名が通っていた。不満はなかった。

「珍しいこともあるものだ」

夫は席につくなり煙草をとりだしながら言った。

「なにがですか」

「あ、ビールをくれ」

彼はウエートレスに命じると、ライターで煙草に火をつけ、妻を見た。

「きみがゴルフ場についてくるなんて、まったく珍しいことだ」

「気晴らしですよ」

泰子は窓の向うの丹沢を見て答えた。

「いや、いま、仲間からからかわれてね。このつぎは着物などではなく、ゴルフが出来る服装でくるんだな」

「わたし、ゴルフはだめですよ」

「下手でもいい。運動になる」

「見物でしたら、いつでもおとしますわ」

泰子はやはり丹沢山脈を眺めて答えた。霞がかかってい

る山の向うにさらに山があるはずだった。山の裏にある山がどんなところか、泰子には想像がつかなかった。篠山は、低い山に囲まれた盆地だと言っていたが、想像のなかの益子はとりとめがなかった。篠山が益子に去ってしまったので夫に従いてゴルフ場にきたにすぎなかった。あんな風に棒を振り球を打ちとばしてどこが面白いのだろう。だだっ広い人工的なゴルフ場のなかで派手な服装の男女が動いていた。人工的な風景に隙がありすぎた。そこには、こちらの感情を移入しても通りぬけてしまうように思えた。こちらの感情を受けとめてくれるものがなかった。

「僕はこれから店にでる。店につけばもう夕方だ。ゴルフ仲間といっしょにのみに行くが、どうだ、いっしょにくるか」

夫はビールをいっばいのんでから妻を見た。

「あら。そんなところまで従って行っても仕方ありませんわ。これで帰らせてもらいます」

「妙な女だ。人なみなことが出来ないんだからな」

しかし夫の声には不満の調子はなかった。泰子は、丹沢を眺め、ビールをのんでいる夫を眺め、隙のない時間が欲しい、と思った。そして、明日、益子に行ってみようかしら、とふっと考えた。去ってしまったひとに、こちらから出かけないかぎり、夏まで逢えるすべはなかった。頭の一片所が空洞のようになっており、そこを風が吹きぬけて行

く感じがした。

篠山が島から去った日、泰子は島の坂道を降りてきながら、不意に、

越の山里冬早み

紅葉がうへに雪ふりつ

昨日錦繡の夢のあと

今日白妙のわがおもひ

という詩をおもいかえしたが、この詩をよんだ詩人は、どんな夢のあとを視たのだろうか、と考えた。泰子は、人工的なゴルフ場の風景を目前にして、自分の頭が冴えていないと感じた。ゴルフ場には春の陽が充ちていたが、その陽の光にはどこかに嘘がありそうに思えた。澄んだ緊張感がともなっていないかった。

3

泰子は、益子の篠山の家の庭にはいったとき、家の裏の小高い松林の丘と庭を眺め、やはりそうだったのか、と思った。余裕がありながら無駄のない風景であった。門はなく、道からそのまま庭にはいれるようになっていた。百姓

家のつくりと同じである。門の前は田圃である。そして庭を囲んで住居と工房と窯と薪の貯蔵室がならんでいた。それらの建物と庭のあいだには空間があった。しかし、空間がありながら無駄が見られなかった。

薪の貯蔵室から丘にのぼる道のかたわらに山桜の木が三本あり、透けるような花弁が陽の光のなかを舞っていた。

「よくこんなところが見つかりましたのね」

泰子は縁側にかねがら言った。

「なに、ここに棲んでいた陶工が、自分の才能に見切りをつけて東京に越してしまったのさ。四谷か新宿の辺に民芸品を売る店をこしらえたとかいっていたが、商人になったのだろう」

篠山は庭の水道の栓をひねって手の泥土を洗いおとしながら答えた。水道のそばに井戸があり、そのそばに真赤な木瓜がひらいていた。木瓜の木の下には毀れた陶器がころがっており、それがごく自然にあたりの風景に溶けこんでいた。

工房では人の話しごえがしていた。

「使用人？」

「ああ。ここで使われていた人をそのまま受けついだのさ。みんな四十をこした婆さん連中だが、売物の日用品はその婆さん連中がこしらえている」

篠山は腰の手拭をとって手をふきながらこっちに歩いて

きた。

「それでは、島の窯は不要でしょうが……」

「あそこは売りにだした」

篠山はぶっきらぼうに答えると、どうぞ、と泰子をうながして家の土間にはいった。はじめから島には戻らないつもりだったのだろう、と泰子は篠山の背中を視て思った。ごまかされた、とは思わなかったが、夏には樂焼を売るために島に戻る、と嘘をついた男が口惜しかった。

篠山は玉露を淹れ、菓子鉢をだした。

「おこっているのか」

「ええ。……すこしばかり」

「子供が二人もいる人妻を相手に喧嘩をしてもはじまらない」

「どうして結婚なさらないの」

「めんどろだからさ。……これでは答えにはならない。縛られて暮すのがいやなんだな」

「もう、鑑定のお仕事はおやりにならないの」

「いや、あれは続けます。よいものを見ることをやめるわけにはいかんのだ」

「ここに腰をおちつけるつもりなのね」

「風狂して、処定めず、などと考えておったが、どうやらここに落ちつきそうになりそうだ。しかし、来るものは拒まず、去る者は追わず、そんな生活をつづけて行くと思う」

取りかえたばかりの青畳がすがしく、障子の白さが、この部屋から暖味なものをとり除けているように思えた。

床の間には春の掛軸、その下には浅い壺に無造作に投げこまれてゐる沈丁花がほの白く浮いており、ほかに部屋には飾りものとなかった。明るく正確な感じのする場所だった。しかし泰子の心の渴きは残酷で切実だった。わたしはここに縛りつけられたようなものだ、と泰子は思った。

部屋の明るいのが泰子には残酷だった。明るいなかで自分の生身をさらすのは、羞恥よりも残酷さがともなった。

そこには容赦というものがなく、といって割りきれた感じもなかった。泰子はおしひらかれながら目を閉じ、頭を左右に振った。これでは帰れそうもないと思うそばから、もつと縛りつけられたいと切望した。女の自分に割りきれた感じがなくても、男の容赦のなさが泰子には深く感じられた。

篠山は益子の駅まで見送ってくれた。駅まで歩いて十五分のみちのりを二人は歩いた。

「裏山の木を伐って薪にし、裏山の土を掘って茶碗をつくる。これが益子なんだな」

と篠山は歩きながら言った。道の両側はすべて焼物を売る店であった。どの店の横庭にも薪が積んであり、素焼の陶器をつんであった。陶器の町であった。

「蕎麦をたべて行かないかい」

篠山がたちどまりながら言った。蕎麦屋の前であった。

「お蕎麦ならいたたくわ」

二人は蕎麦屋の暖簾をくぐった。

「酒にけんちゃん蕎麦をくれ」

益子に越してきて日が浅いのに篠山はこの店のなじみらかった。

「お食事、いつもどうしていらっしゃいますの？」

おかみが茶を運んできて去ってから泰子は訊いた。

「昼は仕出弁当だ。かさねのお重でね、けっこうおいしいものをこしらえてくれる。夜は町にでて酒をのみながら食事をすませる。町に出るのがいやになった日は自炊だが、それも面倒になると酒だけのんで寝てしまう。なんにも心配がないんだな」

「あなたのお友だちの小説家も、たしかそんな生活だったわね」

「高山有七か。おかしな奴だ。もうそろそろ結婚してもよいのに」

「御自分のことは棚にあげていらっしゃるのね」

「いや、こっちは全然おかしくないんだ。独身だといっても周りに女の匂いがしているが、あいつの周りにはまったく女のおいがしないんだな」

やがてけんちゃん蕎麦が運ばれてきた。篠山は酒をのみな

がら蕎麦をたべた。芋や野菜の煮たのをかけてある手打蕎麦だった。泰子は蕎麦をたべているうちにあやふやな気持ちになってきた。益子は遠すぎたのである。そのために、やがて自分が篠山から遠ざかるのだろうか、それともやはり通いつめるのだろうか、それがわからなかった。遠ざかって別れてしまえば、そのあとの自分はどうなるのだろうか。益子に來た以上、引っこみのつかない自分を覗いていた。島にいたときは、週にいつかい篠山に逢うという習慣と行爲の堆積があり、そこに安心してよりかかつていたが、こうも遠いところに男が棲んでいると、夫と二人の子供と営んでいる現実の生活の方がより強く泰子を支配した。島にいたときは、坂道を降りて橋を渡ったときに現実に戻る作用がごくあたりまえのかたちで心のなかに生じたが、ここでは、旅にでた、という思いがはなれなかった。自分自身が曖昧で、きっちり自分の軀（からだ）を収める場所がここにはないように思えた。

「わたし、いま、自分がとてもあやふやなんです」
と蕎麦屋から出て歩きだしたとき泰子は言った。

「なにが？」

泰子は自分を説明した。そして、

「これでは旅人と同じよ」

と言った。

「旅人だからこそ、すこしは生臭さが消えたのではないの

かな」

「島では、わたし、そんなに生臭かったのかしら」

「それを通りこし、凄惨な眺めだったよ」

「あなた、そんな化物のような女から逃げだしたのところがいますか」

「そうではない。ここに越すことは五年も前からの計画だった。しかし、来てくれて有難う。ここに来て、あなたの氣質は紛れることがない。生臭くとも凄惨でも、美しいことにはわりはない。他人から見られていることは決して悪いことではない。他人から顧みられない女よりはましだろう」
「ほめられているのか貶（おとし）されているのか、わからないわ」

益子の駅前広場は春の陽がつぶらで、地面は乾いていた。小山行のディーゼル電車がつくまでにはすこし時間があつた。泰子は、つぶらな陽の光と乾いた地面を覗つめているうちに、渴きはいやされたのに自分のなかには不調和なものが残っている、と感じた。女に変貌するときの泰子にはまじりけがなかった。泰子は自分でもそれを知っていた。そして、変貌し、再び主婦と母親に戻るまでの過程も、自分で判った。しかし、渴きをいやされた後に残された不調和なものがわからなかった。

小山では十七分待つて上野行の急行列車に乗れた。
車窓の外に移り行く春の風景が気持ちなごめてくれた。

益子では、きっちり自分の軀を収める場所をさがしあぐねたが、渴きがいやされたいまは、目前の風景に甘んじることが出来た。そして目前の風景に篠山はうつっていたが、夫と子供の姿はうつていなかった。主婦と母親に戻るまでには、いますこし時間がかかりそうだった。上野につく頃には戻るかもしれないなかった。

泰子はうとうとしはじめた。そして目をさましたら上野だった。

4

帰宅したのが夜の八時すこし前だった。珍しく夫が早く帰ってきており、居間で子供達と談笑しながら夕食をとっていた。

「あらあら、珍しいこともあるものですね」

「たまには家族といっしょに夕食をとろうと思ってる。ところが、六時に帰ってきてみたら、誰もいないんだな」

「申しわけありません。デパートによって藤田さんのお宅に伺ったところ、間もなく雑賀さんと北野さんがいらして、それからお芝居を観に行こうということになり、こんなにおそくなってしまいました」

「では、食事はすませてきたのか」

「いいえ、おなかが空いているわ。いっしょに戴きますわ」

すらすらとくちをついて出たつくり話であった。嘘かまことか、夫は疑おうとしなかった。まことだと信じているにちがいはなかった。すらすらとくちをついて出たつくり話は、女の内部の物理的作用みたいなものだった。こうした咄嗟のつくり話ほど女のたくみさを示すものもなかった。ここには分析しようのない女の解りにくさがあった。

泰子は夫と子供と夕食をとりながら、これで主婦に戻る母親にかえれた、と思った。安堵があった。

「来週の土曜日に、伊東に一泊の予定でゴルフに行くが、いっしょに行くか」

食事を終えた夫が茶をのみながら言った。

「それはおともしてもかまいませんが、わたし、ただ見物しているだけでしよう。つまりませんわ。それより、お友だちと会ってしゃべっていた方が気晴らしになりますわ」

間のぬけたゴルフ場の風景など、もうたくさんだと思っただ。ゴルフ場の不確かな雰囲気がいやだった。あそこには潔さがなかった……泰子はこんなことを考えながら、土曜日にわたしたはたぶん益子に行くことになるだろう、と一週間さきの自分を覗いていた。夫はどうせ東京からまっすぐ新幹線で仲間といっしょにゴルフ場に行くにちがいはなかった。

風呂にはいって床についたのは十一時すぎだった。

結婚して十三年、寝室ははじめからかわらなかった。割